

ごん吉くんしポート〜南吉よもやま話〜

第13回

赤レンガ建物と半田の文明開化



半田赤レンガ建物が7月にオープンしましたが、もうお出かけになりましたか？明治建築界の巨匠、妻木頼黄の設計により、明治31年に竣工した赤レンガ建物は、地元資本によるビール工場として建てられました。

始まりは明治22年、中壱酢店の四代目中壱又左衛門と敷島製パン創業者の盛田善平らによって、「丸三ビール」と名付けられた瓶詰ビールが初出荷されます。明治29年には、東京のエビス、大阪のアサヒなど既存四大ビール会社に対抗して、丸三麦酒株式会社を設立。さらに本格的なビールづくりを目指して、ドイツ人技師を招聘、半田町榎下に新工場を建設したのが、現在の半田赤レンガ建物です。

銘柄も「加武登麦酒」と改められ、明治33年にはパリ万博で金賞を受賞、明治開明期の半田が生んだビールは世界に認められたのです。その後、何度か社名が変わったり、大手ビール会社に合併されたりしますが、

昭和に入ってもビールはつづられ続けます。ビール工場からほど近い現在の岩滑中町で育った新美南吉にとっても、地上5階建、明治期のレンガ建築としては全国で五指に入るという巨大な赤レンガ建物はなじみ深いものでした。全国規模の大手メーカーに地方資本が果敢に挑んだというのも誇らしいことだったに違いありません。

南吉は明治時代という社会の激変期に生きた男たちの物語をいくつも書いています。自らの商売を通じて文明開化を広めようとするランブ売りの巳之助（「おじいさんのランブ」）、人々のためにだれもが使える井戸を掘ろうとする人力曳きの海蔵（「牛をつないだ椿の木」）。彼らは他人や世間に頼らず自らの努力で夢を実現し、それがそのまま社会の幸福につながっています。こうした自助の精神こそが明治日本を発展させた原動力でした。

半田の文明開化を象徴し、明治という時代を力強く生きた先人たちの夢が詰まった半田赤レンガ建物。しかし、やがて戦争がその夢を呑みこんでいきます。南吉が亡くなったのと同じ昭和18年、経済統制の強化により工場は閉鎖され、軍用機を造っていた中島飛行機製作所の倉庫にされてしまうのです。

まちがどVoice

Q 生ごみ処理機や生ごみ堆肥化容器を購入すると、市からの補助金はあるのでしょうか？

A 生ごみ処理機は、1世帯1基まで、購入金額の3分の2（上限15,000円）補助しています。生ごみ堆肥化容器（コンポスト容器、EM容器）は、1世帯2容器まで、購入金額3分の2（上限6,000円）を補助しています。

申請をされる方は、購入したことがわかるレシート等、印鑑（認印可）、振込先の通帳をお持ちのうえ、クリーンセンターへお越しください。



▲生ごみ処理機



▲生ごみ堆肥化容器



▲EM容器

【受付時間】月～金曜日（祝日含む）8時30分～17時15分

【受付場所】クリーンセンター（乙川末広町50）